

1974年度

夏山主要山行

報告書



信州大学山岳会
伊那・松本山岳部

夏山報告書がみな来りました。これにより、おねがいを
すんでいます。夏山をみりかえりて、吾人(それなり)
に山行を樂(マカフ)致(シ)すを得(ル)るいはアツク
せたことと思(ヒ)いますが、やはり小(こ)なミス(事故)は
起(ヒ)っているようです。この小(こ)なと言(ハ)いましたが、この
ミス(事故)を新(しん)員(ぎん)相互(たがい)に、奇(き)全(ぜん)本(ほん)としてマカフ(カ)
ては、なりません。それこそが後の新(しん)員(ぎん)あるいは後の
部(ぶ)の方(かた)計(けい)にさえ、あまさと黙(もく)認(にん)す(認)む(認)む)がてまわ
がるのでは、ないで(し)ょうか。冬(ふゆ)山(やま)と迎(むか)えるこの時
点(てん)で各(かく)人(にん)もらうと、山(やま)行(ぎやう)をみ(み)りかえり、自(みづか)ら
考(かん)えてマカフ(カ)てはしいもので(す)。

山(やま)は、人(ひと)をも受(う)け入(い)れる、か(か)し、本(ほん)意(い)でか
からねば、山(やま)は、人(ひと)間(ま)を拒(き)む。

山(やま)行(ぎやう)は、「本(ほん)意(い)」でマカフ(カ)え

信(しん)州(しゅう)大(だい)学(がく)山(やま)岳(がく)会(かい)

伊(い)那(な)松(まつ)本(ほん)山(やま)岳(がく)部(ぶ)

記(き)録(ろく)係(けい)

夏山報告

北アルプス 剣ヶ峰 縦走

<期間 7月16日～7月25日>

- ▶ メンバー CL 師田信人 (医造1年 部員1年)
- 土田章 (縦走1年)
- 村田卓穂 (農学1年)

▶ 総括及び反省

1年部員ばかり3人で我々は剣ヶ峰から壺までの縦走をやった。縦走自体は無事終えることができたが、その後L会などで指摘されたようにメンバー内での討論、リーディングの問題として事前事後の連絡の不備等、多くの問題点があったことは深く反省しなければならぬと思う。縦走中気が付いた点をまとめるようにする。

- ★メンバーが1年だけということもあり全体的に力量不足が目立った。
- ★食料が縦走するのにあてず、みんながバテる原因にあった。
- ★兼登、生手技術に対する事前の点検が不十分だった。
- ★夏山における雪渓への対処、注意力が甘かった。

それはともかく1年生ばかり3人でやったこの縦走は1人1人にいい経験となったと思う。この経験と反省が今後の飛躍の足場となることを祈る。

▶ 行動報告

7月16日 松本 ~~→~~ 魚津 ~~→~~ 宇奈月
宇奈月では駅の軒下に3人共横になる。

7月17日 ① 宇奈月 ~~→~~ けやき平 → 阿曾原小屋
<起床 5:30 就寝 7:00 ごろ>

宇奈月より黒部峡谷鉄道でけやき平に向かう。水平歩道に出るまでの急登にかなりバテる。水平歩道は大体楽だったが志居谷谷の雪渓をわたるのに気がついた。後半から村田がバテだしてきてペースが落ちる。阿曾原小屋着 3:18。

7月18日 ① → ②

T.S → 仙人湯小屋 → 仙人峠 → 真砂沢小屋
4:21 8:00 11:30 2:45

阿曾原峠までの登りに向口する。峠から仙人湯小屋までは草木がうるさかった。仙人湯小屋上部からは直接仙人谷の雪渓上を歩かす。仙人峠に着いたころから天気が急に崩れ出し、下りで村田がまっかきバテたけど、もっとの急川で真砂沢のT.S.にこころがこんだ。

7月19日 ● T.S → 別山平

9:56 12:20

朝起きた時風雨が強かったので待期にあ。9:00すぎごろより風がおさまってきたので今後のことも考えよまかく別山平までは行くことにする。剣沢の雪はガスが濃くておこす不安だった。

7月20日 ● → ○ T.S → 剣沢
10:17 1:06
3:40 2:09

明け方は小雨も降りつぎ風も強かたんで決殿にするも8:00ごろより急に天気が回復してきたので剣沢ストンに決める。

7月21日 ○ → ◎ T.S → 別山峠越 → 本登山 → 五色ヶ原
4:12 5:03 8:05 12:15

満天下の景色、直伝えがある。夫身もよくやっと最終走らしい。霧風等とコースに合ったので3人とも快調にすすんだ。しかし鬼岳東面の雪上で木田がちょっとした足のゆるみでスリップ、約10m程滑落した。五色ヶ原では梅雨明けの乾杯をする。

7月22日 ○ T.S → 越中沢岳 → スズ小屋 → 薬師岳 → 薬師峠
4:05 8:30 12:55 3:02 (本陣平)

2日に続いて天気がよくなった。おかげで越中沢岳からスズ小屋までと薬師への登りに非常に楽かされる。3人とも最終走の疲れが出てきたためか足に鉛が入ったお存歩き方で、礼ばかり飲んでしまった。ここ3人は1日ばかりで本陣懐かす。

7月23日 ○ → ◎ T.S → 薬師沢 → 雲の平
6:06 8:30 12:20

今日は疲労を考慮して朝はゆるりとする。青い空、白い雲、緑の木植に目も休めながら気楽にすすむ。雲の平への登りはさつかった。雲の平に出てからは天気がおもしろくなってきて、楽しみのお景色を味わえが残念だった。

7月24日 ◎ → ◎ T.S → 三保蘆草小屋 → 双六池 → 壁岳テラス
4:00 6:27 8:16 1:12

朝からからさえない天気だったけど、梅を先方に望みつついたる所。双六池から壁に向かう途中、途中、穂高方面から雪鳴が聞こえてきたりして、ついに本格的に降り出した。死ぬ思いで風当たりのいい壁のランニングに着く。

7月25日 ● → ○ T.S → 壁岳 → 権見温泉
7:46 7:58 11:55

起床した時はすこしい強風、とにかく下山を見合わせて待期する。権見温泉にさへ入ればなんとかなると思ひ、ちょっと強引だったけど下山を始める。壁の頂上からはなんと見えなかった。権見温泉に入ってから(の道)はシラシラ、スパスパ、今にして思えば地獄だった。バス停の脇の茶屋で、3人で最終走成功の乾杯をする。

▼鬼岳東面の雪渓におけるスリップについて

この縦走中 7月21日、10:10ごろ鬼岳東面の雪渓に
おいて村田がスリップ、約10mほどおちた。

現場は工事用のロープが敷きざりてあり、上部
はちょっと傾斜が急だけど下のほうはゆるいスロープ状
になっていて露岩などはなく たゞえさつと滑落してま
命に別条なく止まると思われるような所だった。

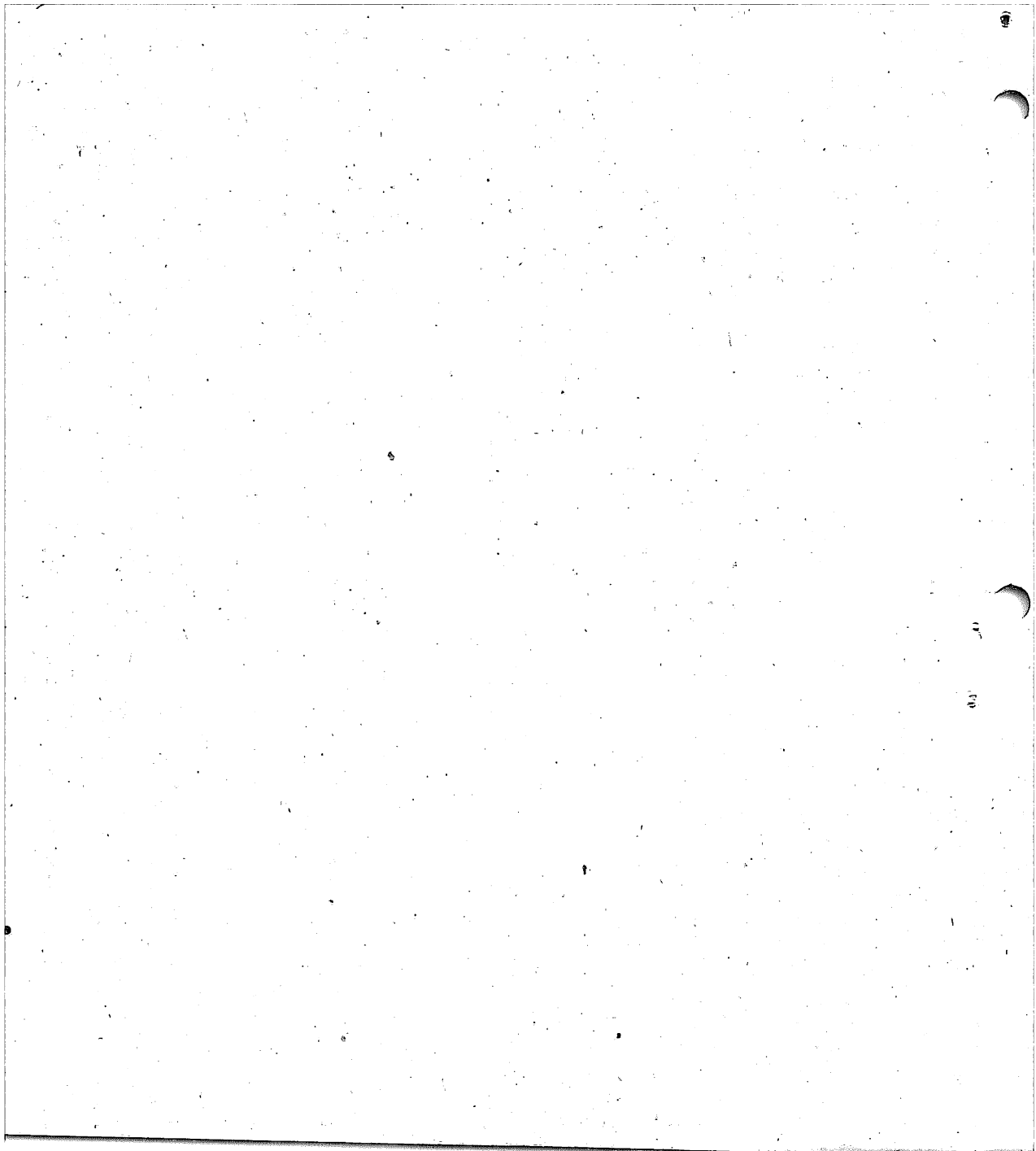
この事故で村田にけがはなかった。

事故の直接的な原因としては

- ①ロープが敷きざりてあつたので気がゆるんだこと
- ②ステップができていたけどかえり踏み固められ
ていて滑りやすくなつていたこと

等があげられるが、その他にモリ-ダ-の野田がTopを
歩いていたなど、1年生パーツの力量不足をさしげ出し
た感じも強い。今後の対策としては主に

- ①夏山の雪渓に対してはもっと充分な心構えを持つこと
- ②もとと下降のキックステップの練習をすること
があげられると思う。



黒部流山行記

期間 7月1日 ~ 7月4日

メンバー (L) 牧瀬政裕
 SL 古橋春夫
 左山 幹雄
 二俣勇司

行動記録

7月1日 ㊸ → ㊹ → ㊺

松本 — 大町 — 扇沢 — 黒4ダム 8:00 — 平沢 11:00
 — 東沢出合 14:00

波の日からの沢登りに 期満と予定の 旧道から ダムから 平沢まで 23km の 時間の 確保 七時半が 遅が 夫が 時間の 余裕 はない。 行程 決定 といふ 様子の だ。 二俣記。

7月2日 ㊻ → ㊼

下3 6:00 — 下1黒ビシが平前 15:30

東沢出合より キツキツ 波登りを いるが 1ヶ所ほど も かなり 7ツ1 弱な 水量は 多い 様子 である。 下1黒ビシが 手前 で 波登り 可能 と思われ 泳ぐ ことに する。 黒部の水は 冷たい。 古橋記

7月3日 ㊽

下3 8:00 — 口元1ダム沢出合 14:00 — 新下沢出合 15:00

口元1ダム沢出合 での 大きな 高さ があり かなり 沢に 下降 した ため 非常に 波登り する 高さ である。 川の 水量も 波登り の うち を 見れば かなり 波登り 難い こと である。 新下沢出合 近く 自然 湖 がある。 二俣の 大きな 湖 である。 眼前 には 自然 湖。 実 黒部 川の 湖 である。 古橋記

7月4日 ㊾

下3 6:00 — 口元1ダム沢出合 15:30

今回の 山行 中 一番 キツキツ 波登り した 所は 沢登り している 時間 だろう。 水流 が つかず 水 質は スクン スクン 臭い せいで 泳ぐ ことが 出来ず。 かなり 苦しい だ。 本日 波登り 部分は ほぼ 泳いで きた ようだ。 二俣記

8月5日 ① → ② → ③ → ④

下 6:00 → 草師沢集合 10:00 — 豆部沢集合 15:00 — 祖父平 18:30
前日よりローパスが薄く、草師沢集合には4人が多く、下り道で私もまたなどを落胆させたものも、黒部の山王、
このあたりで、その人の奥の山王は、祖父平は実に下りとい
うて、下り道、くらくらしい黒部川を登って、はじめてパラダイスにでも
行った気がして、あります。 二人日記

8月6日 ④ → ①

下 8:30 — スイス庭園 10:00 — 祖父沢下階 — 祖父平 12:00
の人が、源流を流すといふ人が多く、あてである。また、
ハーネスばかりで、どうしようもない、しかし、おなじ、
いう、自分と各人、それぞれ、かみしめていたようだ。 古橋記

8月7日 ① → ① → ② → ③

下 7:00 — 祖父沢地帯 / 山荘 11:00 — 高天原山荘 12:30
— 温泉沢 (温泉の少し上流) 13:00
前日より人の多いうちには、あついで、が、やはり高原を合を、
アツクも、おもしろい、上り、人、入、い、な、つ、お、は、
い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、
温泉では、別に、あつ、ハ、
入浴しました。 古橋記

8月8日 ① → ② → ①

下 6:00 — 温泉沢の頭 8:00 — 水晶小屋 9:00 — 兜黒化行
温泉沢を、つめて、い、た、
夏沢を、下、降、し、た、
ミ、い、た、ま、い、た、
天ハルこととした。 古橋記

8月9日 ①

下 6:00 — 早川坂場 7:00 — 針ノ木の 針ノ木峠 11:30 — 扇沢 14:00
下山できる喜びは、まして、針ノ木の、登り、は、
喜ぶに、あつ、針ノ木、
ル、一、本、
も、さ、さ、さ、さ、さ、さ、
古橋記

気象係より。 三山 幹雄

8月1日 大陸に、570hPa(低)が押し、北緯50度近辺(高)がある。
前線は、北緯50度の北東中にあり、日本E.は押し出ている。
日本大陸、晴れである。(8月1日 12:00 東京(日刊))

富士山 ② 2m/時 5°C

8月2日 昨日に加え、九州の南西海上に(高)が、現われ、太平洋
にも、(低)ができ、前線は昨日より南下した。日本には、影
響がなかった。 富士山 ② 2m/時 6°C

8月3日 中部山岳地帯に、地形性の(低)が発生したが、その
影響は別になかった。

8月4日 前日と別に変りなく、よく晴れていた。

8月5日 朝方は曇り、そのために7:00まで行機していた。
その後、晴れ間も見えるようになったが、14:30分頃
に雨が降った。中国大陸にあった低圧部が、しだ
いに日本北部に接近しているためと思う。

8月6日 北海道の東に(低)があり、前線をなしている、前線は、
さほどのびず、私たちの山岳地帯には、影響なかった。
大陸と、太平洋に、強い(高)が、升らした。

8月7日 昨日の前線が伸び、そのために曇りがちな天気であった。
15:00ごろ雨が降りだし、すぐ、しだいに止まるよう
な雨でなかった。
止

8月8日 ドラizzleの日である。

8月9日 前日と同じように、曇れども、よく晴れていた。

言談。 山行は、一つは、行くだけ、何れ、一将、の山行は、おつた。体、力、不足、... (庄山 駿雄)

今回の山行も何もわからぬ一年二人を無事に下山させて下さったのはひとえに優秀なリーダーと勇敢なるサブリーダーのおかげです。

(二候 勇司)

今回の山行は、山、部、に、人、部、し、て、で、は、な、く、し、か、も、SLとし... (勇司)

(古橋 孝天)

山行が、無、事、終、了、し、て、自、ら、不、自、然、と、山... (古橋 孝天)

CL: 牧 瀬 敏 裕

74夏季北アルプス縦走報告書

(1974.8.11. ~ 8.16.)

L. 豊田信行・岡本真一

8.11. ◎のち◎のち◎

松本(7:25) → 白馬(8:45) → 黒ヒシテ(11:05) → 唐松岳T.S.(14:20)
ペース快調。あんな川道と多いとでは山に登ってる感じがしない。
夜半より雷雨激しく、ズクナシで側溝を掘らなかつたので中は水びたし。
突に負けたけど、夏でよかった。

8.12. ◎のち①

T.S.(8:20) → 大黒銅山跡(9:50) → 餓鬼の田圃(11:25) → 祖母谷
温泉T.S.(13:35)
銅山跡にて10数匹の猿とお互によく似た顔だと思いつつお見合い。
温泉で汗を流して、又濡れた衣を乾かす。

8.13. ◎のち①のち◎

T.S.(5:00) → ケヤキ平(5:30) → 阿曾原(10:40) → 仙人の湯^{T.S.}(13:20)
早くも縦走の苦しさを味わう。下痢と慢性的疲労で予定行かずして
ダウン。

8.14. ①のち◎

T.S.(7:55) → 仙人山(9:45) → 池ノ平(10:25) → 二俣(12:10) →
真砂沢出合(13:20) → 別山平T.S.(15:25)
予定より1日遅れている。今年の剣沢は雪が多い。

8.15. ①

T.S.(7:45) → 剣御前山荘(8:20) → 雄山(10:00) → へり越(10:
50) → 獅子岳(12:15) → 五色ヶ原(13:30)
立山人多く、へり越への下り難渋。ここで岡本脚を痛め、登り
のペースくつと落ちる。五色ヶ原T.S.到着時点で下山と決定。

8.16. ○のち①

とにかくにも終わったのだ。平地の暑いと暑いこと。

《反省》Leaderより、

1. 横山不参加は、足のケガが治ってなかったことによる。

2. 予定の半分ばかりで下山したのは、岡本の軽い足のスジ違い

のためだが、今思えば、天候、残り日数を考えず、大部

隊を動かして、山に整率であった。

………を忘れている………

………

………

………は、1年という事も………

た。た。

4. この山行は、計画段階では *Adventure* に行うつもりだったのが、結果として怖く見るチョンボな山行となった。これは、Leaderとしての自覚の不足と連続した長期の山行が原因と考えられるが、目的であったところの下級生への指導 *member-ship*、体力養成はすれをとっても達成できなかったことは、今後の山行を通してなおしていかねばならない。

個人的に：豊田

連続入山のむつかしさを改めて考えさせられ、山行というものの意味を考える次第。Leaderとしては失格だった。又、平地での心情を山へ持ち込むのは山行にマイナスだと考えます。登るときは無心でなければなりません。

同じく：岡本

山行完遂に意識集中できなかったことは、発案者としても *member* としても敗北だった。故障を出したのは体力不足と言うべきだが、個人的精神的には、山行以前に今回の負けの因があり、納得できる山行目的の意識化をもっとしつこくするべきだった。

原作：豊田信行

脚色：岡本真一

印刷：岡本真一とその子分

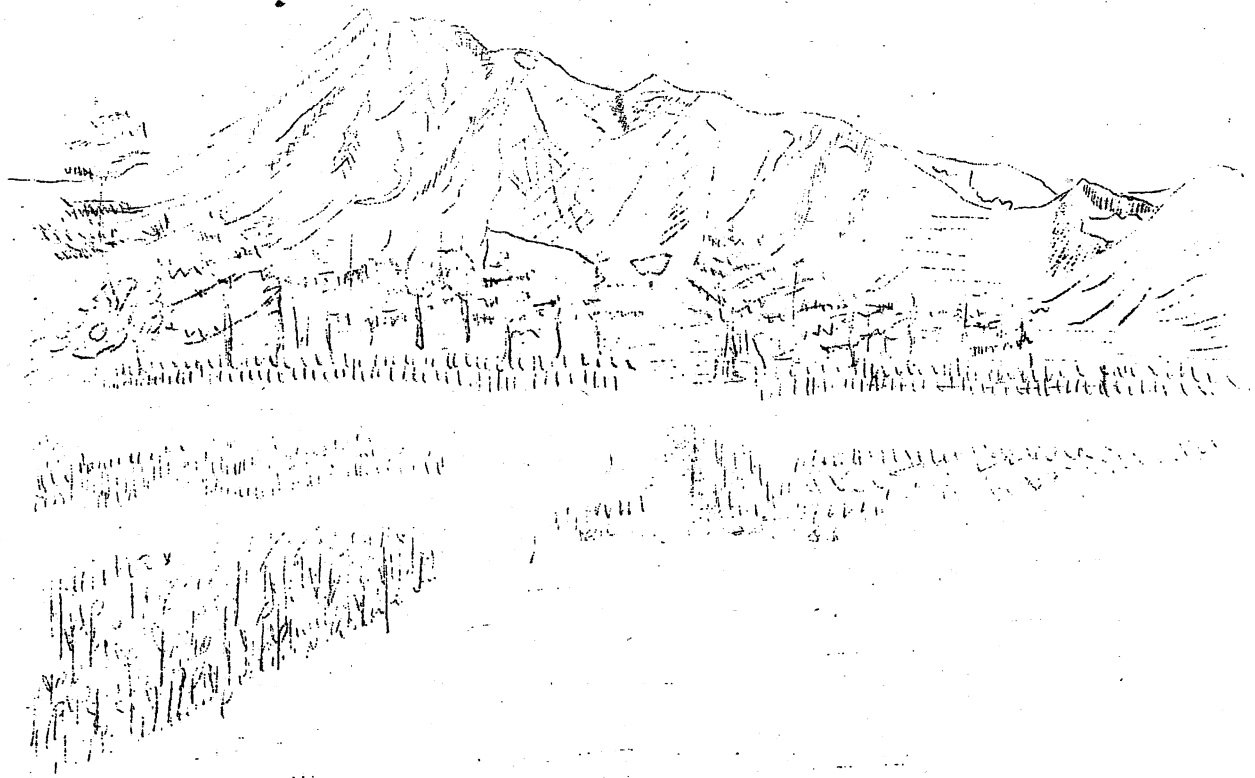
北海道中央高地



1974 Aug. 11~16

北海道中央高地 富良野岳 - 大雪 縦走

Leader: 藤元治朗 (匠 1-2) ; 佐竹義郎 (理 1-1)



I Leader 現

実には、この山に
 拓が、展覧の何れを
 地のを、するに、つ
 のを、開いて、な
 びを、開いて、な
 のを、開いて、な
 ひを、開いて、な
 とひ、開いて、な
 した、開いて、な
 山、開いて、な
 行、開いて、な
 であ、開いて、な
 った、開いて、な
 し、開いて、な
 ら、開いて、な
 く、開いて、な
 手、開いて、な
 休、開いて、な
 一、開いて、な
 勝、開いて、な
 十、開いて、な
 勝、開いて、な
 十、開いて、な
 勝、開いて、な
 十、開いて、な

II. 行動概要

8/11 旭川 - 富良野 - 布礼別 - 登山口 - (C1)

8/12 C1 - 原始原 - 富良野岳 - 上ホロ - (C2)

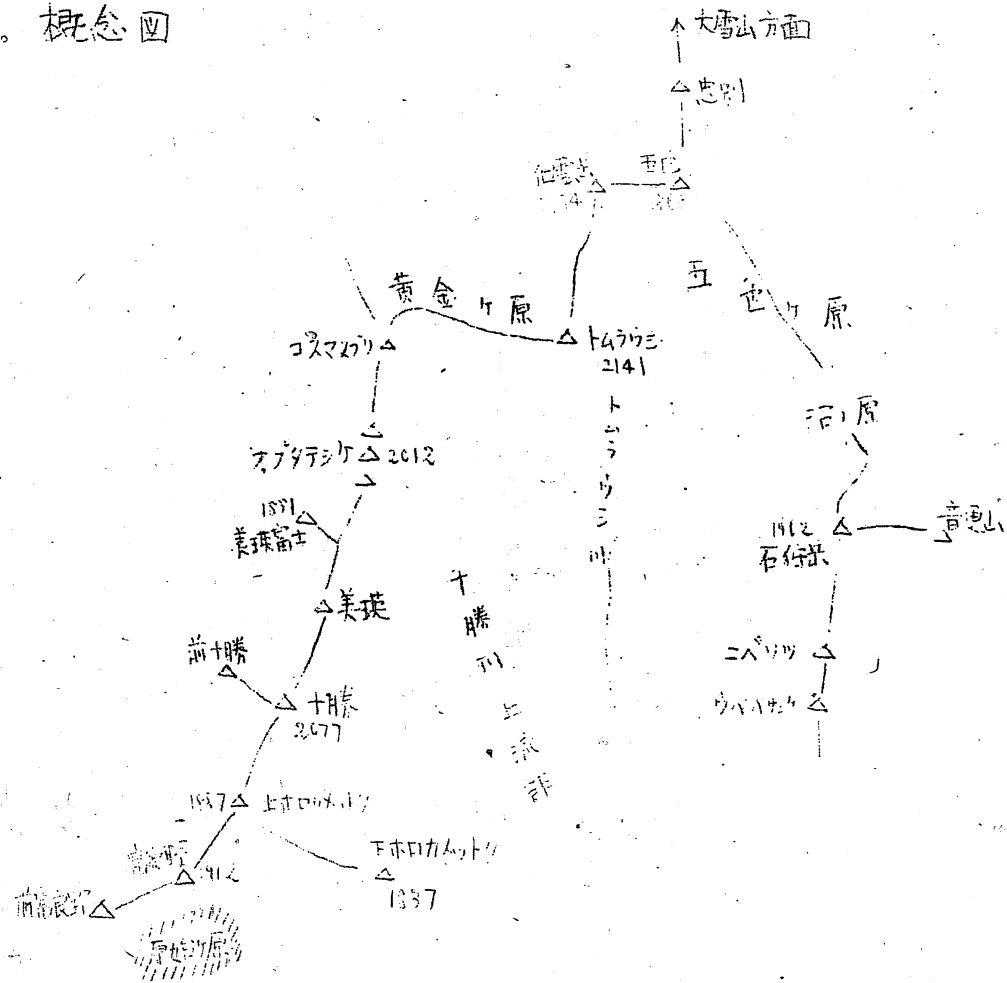
8/13 C2 - 十勝岳 - 美瑛岳 - オブツテリ - 双身池 (C3)

8/14 沈

8/15 C3 - コスマヌプリ - 黄金リ原 - トムラウシ - ヒサゴ沼 (C4)

8/16 C4 - 五色岳 - 忠別岳 - 高原温泉 - 層雲峡

III. 概念図



IV. 行動記録

8/11 1:44 (旭川) - 2:50 (在礼別) - 7:30 (在礼別) - 18:00 (Ci)
信濃野 3500m

快晴。車中からの景色の素晴らしいこと。
 広々とした平原と遠い山。芦別山群、十勝の
 噴煙が見える。暑くてやりきらない。北海道
 で二人な暑いのか？ 農場の一本道を急ぐ。クマ
 に食べられない様に上、注意され、早くもおのれ。
 (F)

8/2 (C1) 5:20 - 7:20 (原始ヶ原) 8:00 - 12:30 (富良野岳) 13:00 - 3:20 (上木口) - 3:30 (C2)

天気は良く、今日も暑さになやまされるの
と不安気味。原始ヶ原着。アブが多い。8:00
出発、いぜんアブが顔や手にまわり精神的
疲れ。富良野岳の登りにかかると多少パテ
味になりペースが落ちる。暑さで調子が出ず
今日は上木口裏の雪渓付近で泊することに
する。(S)

8/3 (C2) 1:20 - 7:00 (十勝岳) 7:20 - 8:30 (美瑛) - 9:00 (瑛)
- 9:30 (ヒナニ小屋) 10:00 - 10:30 (石垣山) - 11:55 (オプタテシケ)
- 13:10 (双子池) (C3)

昨日のバンディーをばん回しようとは元気がよく
十勝岳に登る。頂上を出発して快調にとぼし、
10時頃美瑛富士ヒナン小屋で昼食を取りオプタテ
テシケに向かう。天気がくずれ出し、オプタテ
シケの頂上で少し降られる。イヤな亀坂を一
に下り水の無い双子池でテントを張る。(S)

8/4 停滞

終日雨。午後は雷雨となり、ツェルトの中
かさかさす。一歩ツェルトを出るとカ、ブヨ
押し寄せてくる。泥沼と水を一杯にふくんだ
ブコギを考えると気が滅入る。(F)

8/5 (C3) 7:20 - 8:00 (美真岳) - 9:00 (コスマヌブリ) -
11:10 (1502のコル) - 12:40 (黄金ヶ原) - 2:45 (トウラ)
- 5:25 (ヒサゴ沼)

黄金ヶ原でクマ出没の噂。それこそ必死で雷
をピーピー、眼を凝らして進む。夏の名残りの

高原植物がひ、そりと咲き、葉々と散らばる沼には
北国の秋空が映っていた。トムラ peak。ナキウサギと
エゾリスに迎えられた。群もいなり北の霧峰。足下
は沼。雪沫が落ち込み緑色にキラキラ輝いている。
(F)

8/6 (C) 7:15-8:20 (五岳岳) 8:30-9:35 (忠別岳) 9:45-10:50 (171(2))
-12:45 (分岐)- 13:15 (高原温泉)- 16:00 (層雲峡)- 19:00

ヒサゴ沼は沼というより湖である。エドマツトが何
かで横断してみたい。水は美しく底が見える。朝、沼
をエドマツト分けている砂州を散歩するとサンショウ魚が
飛びはねる。朝日が登り輝く湖面を後にする。足の足
が不調、合宿を控えて大車をとる。石狩、ニペは積雪
期に来てやうう。一踏下野へ。(F)

IV. 感想

さすが北海道だけあって日中は暑くても夜はグン
と冷えた。またどういう訳か虫が多くて終始カユサ
に閉口した。全体通して技術的・体力的に無理はな
く適当なコースであつたが石狩岳方面への縦走がで
きなかったことは多少気にかかっていた様に思う。
(佐々)

ワザワザ北海道まで行って本当によかつたと思っ
ている。ヤッパリ、岩登りばかりやめてたいし、
原始性の高い山行もたいさうな。天の恵み深
き土地を求めらるべきなだけ。来夏は日高か知床か
もっとハジビな山に行きたく思っている。
(藤元)

(補足) - スキー縦走についての考察 -

今回、中央高地を縦走したが、積雪期の下見も兼ねて積りである。雪山は全く違った地形を呈するであろうが、単に1/50000地図を眺んでいるよりもスキー使用において、有益な推測が成されるものと思う。

旭岳 - トムラウシ - 十勝岳 - 富良野岳 の約80kmのうち、オプタテシク連山の一部、美瑛付近、上ホロ近の一部をのぞいてはほぼ全ルートスキー使用可能と思われる。特に、スキー滑降については、

① 北上コースをとる場合

前富良野 → 1300m 2L	富良野岳 → 1900m 2L
十勝岳 → 1700m 2L	美瑛岳 → オプタテ → 4L
黄金ヶ原	トムラウシ → 1700m 2L
化雲岳 → 忠別石室	旭岳周辺、忠別岳 → 平岳

の計約30km

② 南下コースをとる場合

北海岳 → (高根ヶ原) → 平ヶ岳 忠別 → 石室
五色ヶ原、トムラウシ、黄金ヶ原、コスマノブリ周辺
オプタテ → ヒナン小屋 十勝岳 → 上ホロ
富良野岳

の計約30km

で、あまり、差異はないと思われるが、

I. 北上コースをとる場合、南面の斜面を登り、北側の斜面を降りることになる。

Ⅱ. 十勝岳でスキーを十分に楽しめること、オプグテ
中央稜・西壁登攀

Ⅲ. 十勝川上流への介入

の真も考慮すべきである。Ⅰの真については、例えば
陽光あふれる5月の山では大きなポイント（北上なら
ばかりカリの斜面をアイゼンでspeedyに登り、少し
軟い南斜面をスキーで下れる）であるが、3~4月
の中央高地、その天候・地形・雪質を考えると、それ
程weightを占めないと考えられる。

* 北アとの比較 *

積雪期の中央高地を見た訳ではないからあくまでも
夏の地形からの推測であるが、

1. 北アでのスキー縦走は地形が険しく、スキー
使用（特に下降）に限度があるが、中央高地
では一部を除き、技術的にその心配はない。
2. 北アでは目標、目印となるべき山も多く、償
れているせいもあって位置を確認しやすいが
中央高地に於いては非常に困難をきわめる事
が予想される。特に高根ヶ原周辺、トムラ〜
オプグテシケ間はそれが著しい。当然の事
であるが、天気の良い日にスキーを駆使して思
いっきり行程を伸ばすことが必要条件だろう。
3. escape ルートについては比較しにくいだが、中央
高地の場合、南半分は割合に楽にescapeでき
るのはないだろうか。

公 播 心 括

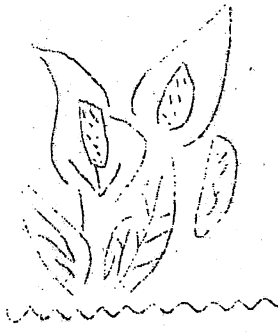
スキー縦走といっても、気休め程度、或いは
ワカンの代りに、スキー縦走の醍醐味
の余り、斜面上のスキー縦走は、小
ヤバ雪の性質を、15分程度、日
動性、15分程度、日
快適、15分程度、日
時、15分程度、日
をフルスノーシュー
なくスノーシュー
スノーシュー計画

縦走といっても、気休め程度、或いは
ワカンの代りに、スキー縦走の醍醐味
の余り、斜面上のスキー縦走は、小
ヤバ雪の性質を、15分程度、日
動性、15分程度、日
快適、15分程度、日
時、15分程度、日
をフルスノーシュー
なくスノーシュー
スノーシュー計画

尚、この中央高地スキー縦走については幾
の記録があると思つが、

1. 旭岳 - 富良野岳をトレーズすること
2. 十勝、上ホロ付近でスキーを乗せし
3. 十勝川上流ハの介入、下ホロスキー
4. オプタテ中央稜、西壁登攀

を軸にして、安全かつ積極的なスキー行を
てゆきたいと思つている。



[三の窓定着]

・8月3日~9日

・Leader 吉田秀樹 (L3) S.L 福島 歩 (A3) 豊田信行 (A2) * ()内は (学部・部歴)
須貝与志明 (A2) 岡本真一 (A1) 藤元治朗 (M1)

・夏に岩登りの定着山行をやるという事は以前から考えられており Member も集った。場所については、合宿の場所が意外に剣であったが、僕自身、剣の西面に入って見たかった事もあり、それまでに考えていた計画(剣)を進めた。しかし、合宿前である事、1年生が2人入るといふ事で、登攀的要素よりも岩稜(やぶ尾根?)歩き、雪けい歩きが主になり、その点、2年以上の Member に不満が残った。実際その点はもっと考慮の余地はあったと思う。1・2年生共に言うべき事は総会の席などで言われているのであえてひかえるが、入山前の態度に少なからず疑問を持たされた。この山行を終えて Member の剣に対する視野が広がった事をこの山行の大きな成果の一つにした。

☆口感想☆

藤元 重い荷物を上げただけの事はありました。

岡本 4日間の行動としては中身が薄くて空腹でした。三の窓からの眺望は昼夜を問わず美しかった。

豊田 もっと登りたかった。西面へ入ったのはよかった。

須貝 } 余りの事で何も言えません。
福島 }

・行動 8月3日 黒田經由内蔵峠平

4日 二股經由三の窓

5日 ① 武の谷二股經由バットルス沢~長次郎コル
② 子ネ北新gcd-源治郎尾根II峠平蔵谷側 Bface

6日 ① 中の右保一中尾根 ② 中の左保-G1

7日 ① 中央千ムニ-ab ② 中央千ムニ-gcd ③ 中央千ムニ-ab

8日 ① 長次郎コル-右保奥壁 ② 左稜線 ③ シヤタルム各ルート

9日 往路下山

8月3日 ① 松本→大町→扁沢 黒四→内蔵助平天場

4:30 起床
 5:30 寝巻
 6:02 駅発
 7:45 扁沢着
 9:30 〃 着
 10:37 黒四発
 11:08 内蔵助谷出合
 13:40 〃 平天場
 (吉田 須貝 14:00着)

・ESSEN当がのんびり眠ったので 出発が40分弱遅れた。
 ・内蔵助谷は急な登りで、しかも道の 側の木が倒れかか。てきている所があり、下を向いて歩いていると、不意に頭を打。て、しんどい時に頭をどっかかれている様で不愉快、極まり厚かった。
 ・須貝君が遅れたのは 12:30頃 脚がつか、たことによる。

(田本記)

8月4日 〇→①

内蔵助平天場(5:20)——ハミゴ段乗越(6:45)——ニ股(9:25)——

(三の窓雪けい)——三の窓(13:30)

ハミゴ段乗越からのマイナーピークはキレイでした。天気は快晴でとても暑かった。剣道の徒走には参りました。冷たい草冷たい雪。一体、沢登りはあんなに冷たい水を考るのでしょうか。
 三の窓、快晴で下から見た時はZinne, NeedleのSKYLINEが紺碧の空に美しかったけど、途中からはバテてどうでもよくなりました。
 テン張。てようやく落着いた。目の前のチンネ、ミッドゲルムが美しい。
 三の窓族の華麗なる5日間の旅まり。

(藤元記)

8月5日 ガス◎ → 1時◎

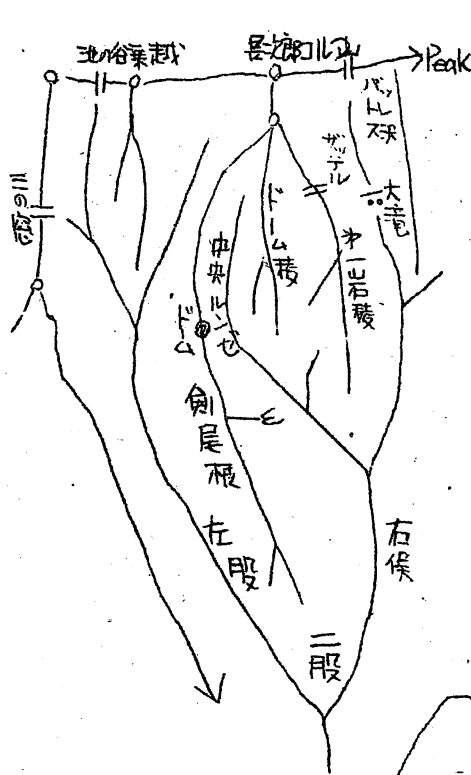
《北の谷Party》 L吉田 豊田 田本 藤元

BC→北の谷左俣→ニ股→右俣→ガッテル中央ピクオ岩稜→ガッテル→バットレス→長治郎コル→BC

5:05 BC発 (ガス)
 6:12 ニ股着 (Sc5 Ci2)
 7:05 中央ピクオのわかれ。両方の雪けい共クレバスで行けぬ為、オー岩稜に取りつくことにする。
 7:17 取付発 ヤぶこぎ
 10:05 ガッテル(ガス)
 10:25 } 偵察(吉田) ガッテルよりすぐにトラバースして右手のバットレス
 10:55 } 偵察(田本) 決に入る。

13:25 長次郎のコル着 (ガス)
 15:55 BC着 テントにつくと雨が降り出した。

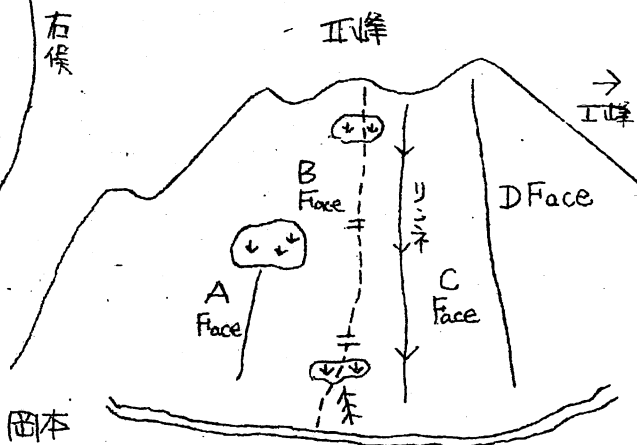
はじめての所はやっぱりえなかった。あの様にクレバスが走っている所、一体どうやって考るのであろうか。ドーム、剣穂根、右岩稜 etc よく見えた。ガスがかか。てなかったらもう少しよかっただろうな。落石をポンポンしてかぶりヒヤヒヤした。ヤアコギは もうごめんた。
 (豊田記)



① 予北新~gcol おり 源治郎尾根 Ⅱ峰
平蔵谷側 face B face
須貝

5:20 BC 発
北条新村 gcol (6:10~8:50)
10:20 熊の岩上部
B face (1:30~2:10)
Ⅱ峰下部のバンドをトラバースする
が目的の C face がわからず結局
B face 右上部を登ってしま(ザム鳥)

3:00 剣 Peak
4:10 BC (須貝記)



8月6日
東大谷中の右俣~
中尾根
吉田 須貝 藤元 岡本

BC 発 (5:20) - 武蔵コル (8:00~8:10) - BC (16:50)

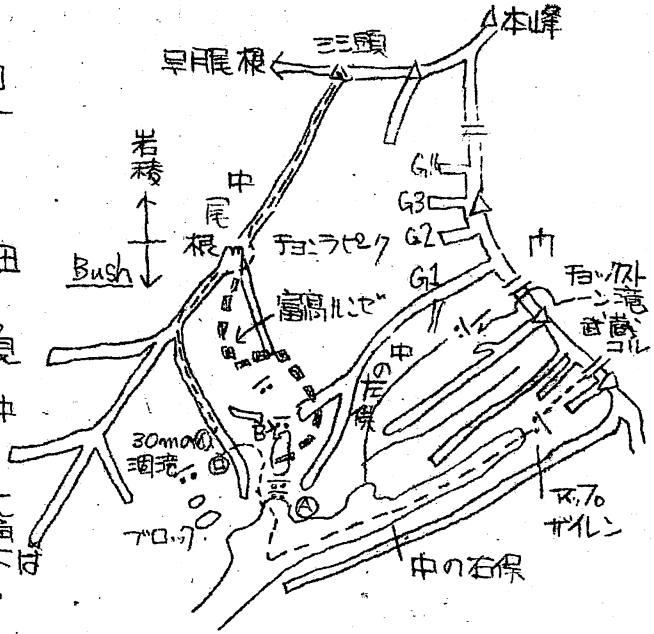
今日は天気が悪いと予想していたらド晴れ。急いで出発の準備をする。次第に人の多くなっていく稜線を武蔵コルまで。中の右俣は下るけれど、下る過程まではほぼ下り状態をなしている。過程のすぐ下より雪けけが始まった。慎重を要するのは 200m 位で後はたっ広い所を A の所まで下れる事なく続く。ここからまき道(右岸)に入り滝を 2 つ越した所で岩が裂けて出来た様な滝(B)を越せず中尾根への小すねルンゼに入る。雪は少しあるがテラスまでは非常に(非情な?)やみこぎで下れる。ヤみこぎから解放されると目と鼻の先に別山尾根・三本槍・コマ草ルンゼが見え距離的・精神的にすぐに早月尾根ミミ頭付近に出ってしまった。雪石も思、た程ひどくはなかった。池の谷ガッテル付近の雪石は恐怖を覚える(3)程である。

《東大谷概念図》

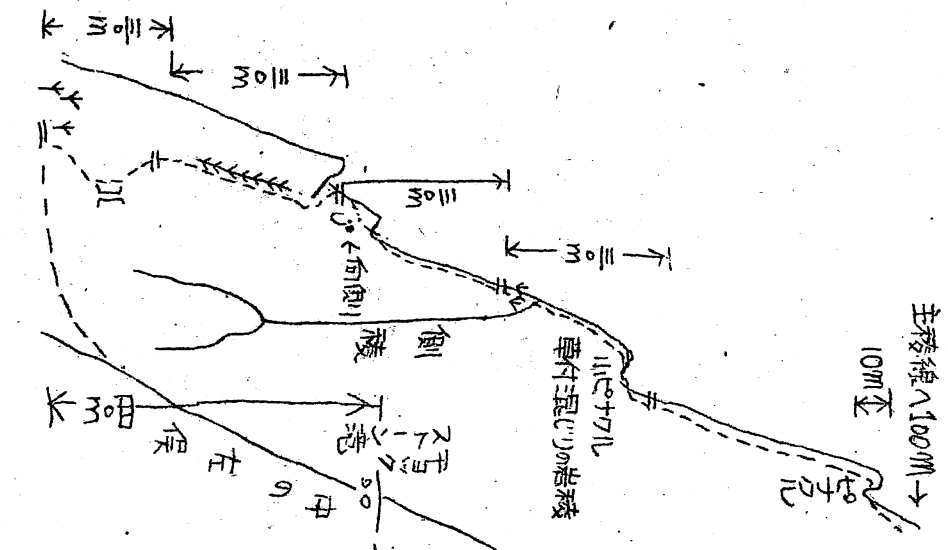
- ①~④ ガイル使用一回
- 踏んだルート
- ▨ 予定ルート
- 雪かき

東大谷G1 福島 豊田

- 5:20 BC巻。全員で出発。日本海、能登半島も見える。
- 7:30 内着。完全装備で中の左俣に入る。
- 8:25 手ノアストン 滝を下る。ガイル。回収と共に落石あり驚く。とに角がしがしの滝次。滝下は落石のにおいがした。
- 8:50 取付着
- 9:20 "巻 TOP 豊田 ツルバで4時手 (~11:30)
- 11:50 10mのヤケルを慎重にガイルを出してゆく。
- 12:25 主稜線に出る
- 14:50 BC着



G1の2・3時、手目がエラかった。初めてのこれもあり人の行かぬ所へ行くのは勉強になりました。中の左俣は福島氏曰く一巻谷の権だ。
(記 豊田)



8月7日 〇ガス→②

中央テムニー a.c. L 福島 藤元

5:40 BC発 6:10 取付 8:30 チンネの頭

(i) 予の差で1番。後続パーティが続々くる。福島さんがTOPで行った後、登り始めるが、後続のソニーのTOPがリッパに取付いてしまい、仕方なくテムニーよりを登る。リッパにかけた。

(ii) 確保中落石がすぐ脇に落ちる。ソニーのTOPがアツアツ。ガスはまだ出ていないし、高度感もあり、後述の稜線がキレイ。やはりチンネはよい。

(iii) がL端を落石に神経をすり減らしてαバンドへ行く。

(iv) 傾斜がグッと強まりFace状、ガスが着いているので余り高度感はない。後続パーティにセカされた登攀でした。(藤元記)

中央テムニー a.c. L 吉田 岡本

11:50 南始。1時間半以上の時間待ちの末。しばしばガス晴れてリッパがす、ホリ見える。

12:40 中央テムニー終了、どういふ事もなかった。中央バンドよりコンテでゼナクル上部へ。再び時間待ち。風強く寒い。

13:30 αバンド取付南始。雨パラつき出し、すぐ本降りとなる。風も強く身体震える。a.c. 共ホールド スタンス豊富。

14:30 終了 即下山 BCへ (岡本記)

中央テムニー g.c.d. L 須貝 豊田

12:05 南始 TOP 須貝でツルへ。

13:00 中央バンド

13:20 a.c. 混んでいるので須貝が経験あるg.c.d.に取付く。

14:20 終了、即BCへ。(豊田記)

*この日藤元は別山尾根より室堂へ下山。福島長次郎コルまで見送りに。

8月8日 〇

吉田・須貝でドーム稜へ行く予定でしたが早朝ガスを認めたため変更...

チンネ左稜線 L 吉田 須貝

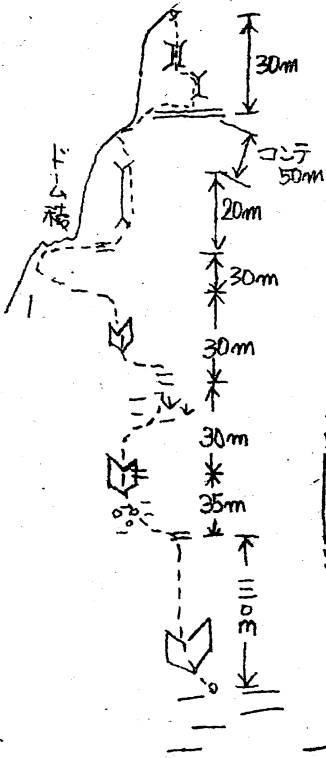
5:20 取付 17:50 終了

昨日の雨の為かチンネには一番に取り付いた。朝日を受けながら、静かな2人だけのチンネを楽しむ

ジャンタルムP3本クラック~P2 L 吉田 岡本

P1 四角ルート L 須貝 岡本 (スリザレシで取付付近へ下降)

《右保興産》 し福島 豊田



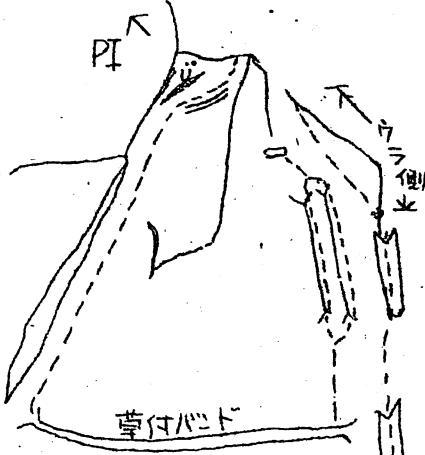
(長次郎コルよりガッテル)

コルよりの降口でハーケン2本打ちアスガイル。後は2日目の逆をガッテルまで下る。

(ガッテルより剣尾根の頭)

浮石が多くどこでもルートを取れそうな崖で左へ凹角を、とルートをつないでいくとドームへ出てしまった。最後のクラックはすきりしたものであった。

左中右
C三本
クラック
ルート



《Cクラック》 し吉田 岡本

《三本クラック(左側右側)》 須貝 豊田

アスガイルにて降

*テンネで登れるルートもなくなりのみびりとジャンタルムを過ごす。

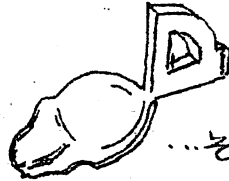
8月9日 〇

往路下山。今日も天気がよい。吉田は胃の調子が悪く途中ではいたりしてバテ、又福島は二段から少し上流で足首を捻挫した為、内蔵助平天場で解散し、須貝、豊田、岡本は先行した。



ルークンは
人という有機体と
岩という無機物を結ぶ

クライマーからのメッセージである...



...そんな長がする